



2014年4月から、米国テキサス州、ヒューストン市のベイラー医科大学、Center for Cell and Gene therapy (CAGT) に研究留学させていただいております。

ヒューストン市は米国の南西部に位置し、人口200万人、全米4位を誇る大都市ですが、中心市街地でありながらも豊富に木々の緑を目にすることができ、私達の住んでいるアパートの庭でも、いたるところでリスを目撃するような、のどかな街です。ひとたび郊外に出るとひたすら大平原が広がっており、「偉大なる田舎」とはまさにいい得て妙だと実感させられます。近年では石油化学産業の発展やNASAを始めとした航空宇宙産業、またテキサスメディカルセンターを中心とした医療産業の発展が目覚ましく、アメリカのなかでも成長著しい都市として注目されているようです。

このヒューストン市中心やや南東部に、54の医療関連施設、21病院、3大学を有する世界最大の規模のテキサス医療センターがあります。ホテル、レストラン、図書館からなんと警察まであり、まさにメディカルセンターが一つの街といった印象です。私の留学しているラボもまさにこのテキサス医療センターの一角にあります。

ラボでのメインの研究テーマは癌に対するT細胞療法であり、遺伝子改変技術を用いて癌を特異的に効果的に攻撃することの出来るT細胞を作り、癌の治療に応用していくということを目標にしております。信州大学に在籍中には造血細胞移植や樹状細胞療法に携わっていたこともあり、もともと細胞免疫療法に興味があったこと、同じくベイラー医科大学に研究留学されていた中沢洋三先生の紹介もあり、当方で働かせていただくことになりました。

期待と希望を胸に4月から働き始めましたが、いざラボでの生活が始まると現実は大変難しく、日々自分の英語力とbasic scienceの素養のなさに打ちのめされる日々です。留学開始から約1年経ち、ようやくラボでの働き方、研究の進め方、scientificなものの考え方が少しずつついてきたように感じております。

そんな中で良かったことはといえば、四苦八苦している夫を横目にアメリカ生活を心から満喫している妻と、最初は戸惑いながらも頑張ってプレスクールに通い、びっくりするくらいきれいな英語をしゃべり始めている娘の存在だと思います。家族が楽しそうにやっているのを見ると、自分も頑張らなければと励まされます。

またご存知の通りアメリカは多民族、多国籍の国家です。人々がお互いを尊重しあい生活するということが、難しい課題を抱えながらもそれなりに成立しているということは、やはり評価に値するのではないかと思います。人々が多様な思想、価値観をもっていることを前提に必要な最小限のルールで生活するという点は、日本人の生活行動様式とは対照的であり、あまりの大雑把ぶりにあきれつつも、慣れとは恐ろしいもので、最近では日本人ももうちょっと気楽にやれば良いのになどと思うことも出てきました。

また、アメリカに来てみて中国人や韓国人が非常に親日的であることにも驚かされました。特に中国人はフレンドリーで、日本にも大変興味があるらしく、ラボでもアパートでも、すぐに話しかけてきていろいろと日本のことをきいてきます。その割に意外と日本のことを知らず、たいていの中国人は日常的に日本人が漢字を使っていることを教えると非常にびっくりします。こういった些細なことですが、日本で生活していると全く気づかなかったようなことを日々実感し、刺激的な生活を送れるのは幸せなことだと感じております。

最後になりましたが、このような貴重な留学の機会を与えてくださいました信州大学小児医学教室の小池健一先生、渡米前にいろいろと貴重なご助言をいただきました下平滋隆先生はじめ、ご支援いただきました多くの先生方に心より御礼申し上げます。まだまだ悪戦苦闘の日々ではありますが、出来る限り多くのことを吸収して、帰国後には長野県の医療と信州大学の発展のために還元していきたいと考えております。

(2015年4月)

(信州大学医学部小児医学教室所属)